

あたりまえの普通

茨城県 土浦日本大学中等教育学校 3年
廣瀬 裕貴 (ひろせ ゆうき)

「かわいそうに…。大丈夫？」

そんな言葉を、何度かけられてきただろうか。物心ついた時には当たり前のように、周囲の大人の方は僕にそう言った。生後七か月で発症した消化器疾患の影響で、僕は一才になる前から、ミルクや食べ物を口にする事ができなくなった。そのかわりに、中心静脈栄養によって、生きていく為に必要な栄養を摂っていた。それは、心臓近くの太い血管に胸や首からカテーテルを挿入し、二十四時間点滴の機械で高カロリーの輸液を送り込むものだ。だから僕の身体からは太いチューブが出ていて、移動する時は大きな点滴の機械が常に一緒だった。もちろん、生活の場は病院だ。

病院の中では、僕は特別ではなかった。同じように二十四時間点滴に繋がれている友達はたくさんいたし、呼吸機をつけてストレッチャーで散歩をしたり、腹膜透析の機械に繋がれたまま遊んでいる事も特別ではなかった。僕には、耳の聞こえない友達、言葉が話せない友達、目の見えない友達、歩けない友達、寝たきりの友達、意識がなく呼吸機に繋がっている友達がいる。そんな中で、僕は特別ではないどころか、普通に日常生活を送っていたし、楽しい事や嬉しい事だって沢山あった。

僕の両親も、僕を特別扱いはしなかった。僕の成長にあわせて、同じ年頃の子供達が経験している事は、可能な限り僕にもその機会を与えてくれた。アルバムを開くと、大きな点滴のポンプをキャリアに積んで、いろいろな所へ出かけた時の写真がある。主治医の先生には、随分無理なお願いもしたようだ。春には桜の花のトンネルをくぐったり、夏には公園で水鉄砲を楽しんだ。秋にはコンサートにも行ったし、冬には雪遊びだっただけでなかった。薬の影響で、骨が弱く感染しやすい僕が病院の外に出る事は、相当な覚悟と細心の注意が必要だったが、両親は普通にこだわって僕を育ててくれたし、病院でのこの生活しか知らない僕にとって、これが普通の事だった。

三年半の入院生活を経て、僕は退院して幼稚園に通う事になった。これも、僕にとって簡単な事ではなかった。大きな点滴の機械は小さな携帯用に変わり、輸液バックと一緒にリュックに入れて背負う練習から始まった。そして、受け入れてくれる幼稚園を、両親は一生懸命に探してくれた。三年保育の年少さんで入園したその日から、僕の普通の生活は激変し、普通が特別に変わって行ってしまっ

た。この時ようやく、僕はあの言葉の言意を理解するのだった。

「かわいそうに…。大丈夫？」

僕は重いリュックを背負って、歩くのがやっと。階段も登れなければ、走る事もできなかったし、水分制限・食事制限はとても特別な事だと知った。そして何より、機械に繋がっている僕は、特別な存在として定着したのだ。

そんな特別な日常の中で、矛盾を感じる出来事も多くあった。外見上、点滴のチューブと背負っているリュックにさえ目がいかなければ、僕は普通に見える。あるショッピングセンターの障害者用パーキングに母が車を停めた時、一人の男の人が近付いて来てドアを叩いて大声で言った。

「ここがどういうスペースか、考えたらどうだ。あなたみたいな人が居るから、本当に必要としている人が使えなくなるんだ。」

母は少し悲しそうな顔で、静かに答えた。

「必要とする一人なんです。」

それでも、男の人は納得しないのか、僕達が車を降りるのを待っているようだった。母は車を降り、トランクから僕の車椅子を降ろした。体力の無い僕は、長い距離を歩く事が難しく、車椅子を利用する事も多かったからだ。するとさっきの男の人は、

「まぎらわしいな…。」

と、怒ったままその場を離れて行った。

多くの人のおかげで、僕は今、元気に生活する事ができるようになった。僕は、障害者とか健常者と言う言葉が、あまり好きではない。なぜなら、その境目が僕には見えないからだ。あの駐車場で出会った男の人も、決して間違った事は言っていない一方で、大きな間違いをしてしまったのは、その境目に気付かなかったからだと思う。一言で障害者と言っても、さまざまな状況の人が居ると言う事を、日常生活の中で深く考える事はそう多くないと思う。そんな中で、障害を持つ人達が、少しでも普通に生活していくには、特別な存在にしない事が大切なのだと、僕は自分の経験の中から学んできた。

「かわいそうに…。大丈夫？」

同情して、そう言葉をかけるのではなく、

「何かお手伝いする事は、ありませんか。」

そう言って、さりげなく支えあえる社会になる日が来るように、両者の立場を知る僕だからこそできる事を、考えていきたいと思う。